# 第2回文京区アカデミー推進協議会　議事録

| | | | |
|---|---|---|---|
| 日　時 | 平成27年5月27日（水）　18:30～20:30 | | |
| 会　場 | 文京シビックセンター3階　大ホール会議室 | | |
| 委　員 | 会　長 | 水越　伸 | （東京大学教授） |
| | 副会長 | 久松　佳彰 | （東洋大学教授） |
| | 委　員 | 青木　和浩 | （順天堂大学准教授） |
| | 委　員 | 野口　洋平 | （杏林大学准教授） |
| | 委　員 | 田中　雅文 | （日本女子大学教授） |
| | 委　員 | 金輪　精梧 | （文京区町会連合会　副会長） |
| | 委　員 | 田中　ひとみ | （文京区女性団体連絡会　広報部長） |
| | 委　員 | 上田　武司 | （文京区商店街連合会　副会長） |
| | 委　員 | 鈴木　秀昭 | （東京商工会議所文京支部　事務局長） |
| | 委　員 | 天野　亨 | （文京区心身障害者福祉団体連合会　理事） |
| | 委　員 | 平井　宥慶 | （文京区民生委員・児童委員協議会　会長） |
| | 委　員 | 春田　孝二郎 | （文京区高齢者クラブ連合会　副会長） |
| | 委　員 | 鴻瀬　太郎 | （小学校PTA連合会　会長） |
| | 委　員 | 三浦　徹 | （中学校PTA連合会　理事） |
| | 委　員 | 柳澤　愈 | （文京アカデミア学習推進関係委員会、文京区アカデミア講座企画委員会　委員長） |
| | 委　員 | 塩見　美奈子 | （文京区生涯学習サークル連絡会　会長） |
| | 委　員 | 田辺　武之 | （文京区体育協会　副理事長） |
| | 委　員 | 髙澤　芳郎 | （シエナ・ウインド・オーケストラ　事務局長） |
| | 委　員 | 牧野　恒良 | （公益社団法人宝生会　事務局長） |
| | 委　員 | 白井　圭子 | （文京区観光協会　副会長） |
| | 委　員 | 荒木　時雄 | （公益財団法人東京観光財団　常任理事） |
| | 委　員 | 森岡　隆 | （文京区国際交流フェスタ実行委員会　委員長） |
| | 委　員 | 小林　博 | （区民公募委員） |
| | 委　員 | 増田　純 | （区民公募委員） |
| | 委　員 | 金坂　吉雅 | （区民公募委員） |
| | 委　員 | 黒木　美芳 | （区民公募委員） |
| | 委　員 | 黒田　千恵子 | （区民公募委員） |
| | 委　員 | 松井　良泰 | （公益財団法人文京アカデミー　事務局長） |
| | 委　員 | 小野澤　勝美 | （アカデミー推進部長） |
| 欠　席 | 委　員 | 井上　充代 | （文京区スポーツ推進委員会　副会長） |
| | 委　員 | 佃　吉一 | （公益財団法人アジア学生文化協会　常任理事） |
| | 委　員 | 三谷　規子 | （文京区青少年委員会） |
| 事務局 | 山﨑　克己 | （アカデミー推進部アカデミー推進課長） | |
| | 矢島　孝幸 | （アカデミー推進部観光・国際担当課長） | |
| | 熱田　直道 | （アカデミー推進部オリンピック・パラリンピック推進担当課長） | |
| | 細矢　剛史 | （アカデミー推進部スポーツ振興課長） | |

福田　昭正　（アカデミー推進部アカデミー推進係長）
山本　恵美子（アカデミー推進部オリンピック・パラリンピック調整担当）
支援事業者　株式会社創建　大谷・氏原

資　料　資料第1号　文京区アカデミー推進計画　アンケート調査結果について
資料第2号　文京区アカデミー推進計画基礎調査報告書（平成21年アンケート）
資料第3号　文京区アカデミー推進計画　体系イメージ
資料第4号　分科会の進め方について

議　事

1. 開　会

水越会長より、開会のご挨拶をいただいた。

水越会長　参集いただき、お礼申し上げる。この協議会のあと、各分野の分科会で議論をすることになる。本日は、前回いただいたアンケート調査の結果の続報について、補足をふくめて説明いただく予定です。その後、学識の委員や事務局との協議内容をまとめた推進計画の大枠について話をしたい。分科会にて協議いただく際の元となる基本理念の部分になる。また、分科会の進め方についてもご意見をいただきたい。

2. 議題

(1)アンケート調査集計結果について（文京区の現状、課題等についての共有）

事務局より、資料第1号に基づき、アンケート調査結果について、平成21年度の調査との比較結果、および国・東京都・他自治体との類似調査との比較結果について報告を行った。

水越会長　調査結果の追加分析に関して報告いただいた。スポーツが苦手な方が「スポーツをやりたくない」を思うのは、自分の身に照らしてもそのとおりだろう。他人に見られると嫌なものだ。病気やケガを理由にスポーツをやらない人が多いという印象がある。
外国人との交流は、挨拶するぐらいの方が事業には参加したくない傾向にある一方で、交流したいけれども機会がないという人は参加したいと思っている。

田中委員　興味深い結果だと思う。感想をいうと、ひとつは外国人との交流に関する選択肢について、「親しくつきあっている」「ときどき話をする」「あいさつをする程度」の3つと「交流したいが機会がない」「交流したいと思わない」の2つは違うイメージでとらえた可能性はないか。そうすると、「あいさつをする程度」がもっとも外国人との交流が薄い人たちだとみなした方がよいだろう。参考までにいうと、このような調査は選択肢の区別をもっと分かりやすく設計する必要がある。
2つ目は、実施頻度の相関をみると、スポーツをして体を動かす系統の活動と、体を動かさない生涯学習と文化芸術で分かれているのが興味深い。スポーツとほかの分野はあまり関係がなく、文化芸術と生涯学習に相関関係があるということは、両者が割と近い関係にあって、スポーツがすこし違う傾

向だということになるのがおもしろい。

水越会長　田中委員に指摘いただいた外国人との交流に関する選択肢に関しては、自分も同じように感じていた。今後、アンケート調査を実施する際には、できれば統計調査の専門家に相談をしながら調査項目をつくる方がよいだろう。

2点目の指摘もおっしゃるとおりだろう。ただ、まちを歩くこととジョギングの相関は本来的にはあって然るべきだとも思う。

あと、地域アカデミーに近い地域の方ほど生涯学習講座に参加しているという報告があったが、当たり前のことだとは思うが、密度高く設置されているからこそであり、大切なことだと思う。

黒木委員　質問したい。文京区には外国人と交流している方がたくさんいる。ただ、アンケートでは、イベントには参加したくないという結果が出ている。回答者に偏りがあるのではないか。

水越会長　田中委員のご指摘にも通じることだが、調査結果は丁寧にみていく必要があるだろう。

平成21年度の前回調査とは設問が異なるために比較がしづらくなっていると思う。たとえば文化芸術の鑑賞の有無についても、79.5%の人が鑑賞しているという数字だけを取り上げて、前回と比べて何かを語ることはよろしくない。くり返しになるが、次回アンケート調査をされる場合には、設問の言葉づかいや選択肢の立て方は十分に検討した上でするべきだ。統計調査の専門家にサポートについてもらうことも必要だろう。

小野澤委員　前回調査と比較できないことは気づいていた。ただ、前回のアンケート調査が現行のアカデミー推進計画の内容にほとんど反映されていないという指摘を庁内・議会で受けていた。今回の調査は、新しい計画づくりに反映させたいと考えたものだった。

水越会長　新しいアカデミー推進計画をつくる責任を持つ協議会の立場でいうと、やはり専門家に第三者的な立場で入ってもらう必要があったと思う。今回のアンケート調査については吟味する必要があるのではないかと感じている。

田中委員　生涯学習の取組状況に関する内閣府の調査は、文京区との設問や選択肢が異なるので純粋な比較は難しいと思う。内閣府の調査では、平成24年度の段階では生涯学習の定義があいまいだった。専門的には「偶発的な学習」と呼ぶ、ボランティアやスポーツを行うなかで経験を通じてたまたま学ぶこともふくめて生涯学習と定義していた。そのためスポーツも学習という前提で設問がつくられていた。平成24年度の調査では概念のあいまいさが改められており、スポーツであれば、スポーツに関して学習することに限定された。

一方、文京区の今回の調査における生涯学習は、スポーツや芸術に関する学習が含まれるのかどうかが分からない設計になっている。それをふくめると内閣府の調査との比較もやりやすくなるだろう。それぞれの自治体における政策課題との関係で調査が行われるので、文京区における生涯学習の定義において、スポーツや文化芸術に関する学習を聞く必要がないと判断されるのであれば、それは仕方がないとも思う。ただ、もうすこし広い意味

での学習活動を分野別に把握するという方向で考えてもよいのではないかと思う。

野口委員　観光に関する他自治体との比較をみると、指摘のあったとおり、新宿区や台東区と比べると経済的な効果に対する期待がそれほど集まってないことが分かります。また、アカデミー推進計画に関わる部分としてもっとも気にしていることが、歴史文化資源の保存・継承だ。文京区には多くの文化資源・歴史的な資源があるという認識が区民ならびに区役所にあると思うが、隠れた資源を新たに発掘しようという意識が、ほかの地区や地域に比べると弱いように感じている。文化資源の発掘や、自分たちの区が外部からどのように評価されているのかということは、今後知るべきことではないか。

水越委員　今回行われた調査結果を、平成21年度の調査や他自治体との調査結果と単純に比較することはできないが、各分科会での協議の参考にしてもらいたい。不明な点や解釈が分からない点については、事務局や学識に聞いてもらうとよいだろう。

大事なことは、今回の調査結果で、1年間で生涯学習、広い意味でのアカデミーに関係していないという方が文京区でも半数いるということだろう。どの分野でも、この計画に関わっているのは区民の半数ぐらいだということを基本として認識しておくべきだと思う。

(2)推進計画の基本理念、目標、基本方針のイメージについて

事務局より、資料第3号に基づき、新しい計画の基本理念・基本目標について説明を行った。

水越委員　現行計画の総論で書かれていることについて報告がなされた。補足をすると基本理念である「区内まるごとキャンパスに 「文の京」豊かな学びと交流を楽しむまち」は変えられない。この言葉を新しい計画でも踏襲することが前提となります。基本目標については抽象的であることと、各分野の事業との関係がよくわからないところがある。現行計画では3つの目標だったものを、新たな計画では4つにしようということだ。

さらに現行計画では5つの行動が設定されていたが、計画の評価を行うにあたってはあまり機能していなかった。それをなくして、新しい計画では、文化芸術分野での鑑賞や活動、生涯学習で自分が先生になってみるといった区民の行動に基づいて、3つの関わり方を設定しようということだ。さらに、現行計画の5つの行動の主語が区であったのに対して、3つの関わり方では主語が区民になっている。「する」「みる」「ささえる」という言葉がよいかどうかについては議論のあるところだろうと思うが、5つは多すぎるので、3つにまとめたというように理解してもらえるとよいだろう。

それら総論の下に、5つの分野が配置されている。生涯学習やスポーツなどの5分野が一体になっていることは大変ユニークで、文京区のおもしろさだと思う。それは大前提としてあるわけだが、一方で、じつは5つの分野のどれにも入らない、ないしはすべてに関係する事柄があります。前回の協議会で

は、それを「横串」と呼び、学識委員から提案したいという話をしたと思う。それが、資料に示されている「横断的施策」として示されている5つだ。
ひとつは人材育成のことだ。ある世代の方だけを対象にするのではなく、若者も年配の方も積極的に関わってもらえるような人材育成が必要だということは、すべての分野に共通すると考えて挙げている。
2点目は情報提供や情報集約の方法に関することである。3つ目は、あいまいな言い方になるが、少子高齢化への対応だ。高齢者、若いお母さん、子どもなど、少子高齢化という日本社会の全体的な人口動態に対する対応が必要だと考えている。
4点目は、これまで取り上げてこなかったことですが、新しい文京区のイメージを共に創ることだ。野口委員から指摘があったが、文京区の観光を考えるときに、既存の資源を新しい角度からみることでおもしろさが発見できるのではないかと考えた。伝統的な芸術や芸能も、新しい見方をするとおもしろいことがあるとも思う。
最後は大学間連携の形成だ。文京区には19の大学があることを前提として「区内まるごとキャンパス」という基本理念が立てられている。国内でも有数の大学が集積している地域だが、文京区と大学との連携は、大学ごとに個別に進められている。一時的に複数の大学が研究室単位で連携することはあるが、バラバラに進められている感がある。区も大学もそれぞれに事情があるとは思うが、大学でも学生を社会に出させて経験を積ませようとしているので、そういう風潮を利用して、大学間で連携できるとよいと考えている。

黒木委員　新しい計画のイメージは素晴らしいと思う。文京区のイメージの共創を進めることもよいと思うが、そのときの基本理念が現行計画のものを踏襲するのはいかがなものか。新しくすることはできないのか。区民は、文京区だけで学習をしているわけではないので、たとえば都内まるごとキャンパスに変更するなど、新しいイメージを打ち出すことはできるのではないか。

事務局　区の基本構想や、アカデミー推進計画の前身であったアカデミー構想に照らしても、「区内まるごとキャンパスに」という基本理念は踏襲していきたいと考えている。

水越会長　キャッチフレーズは重要なので、よく吟味した方がよいと思うので、黒木委員の意見はよくわかる。区民が区外で学んでいることも多いだろう。そもそも人びとの暮らしている文化圏や経済圏は行政圏とは異なるので、区民をもってしても区の境目は分からないだろう。ただ、それも含み込んだ上で、とりあえず基本理念は「区内まるごとキャンパスに」のままにしておいてもよいのではないか。

野口委員　サブタイトルを変更することは可能なのではないか。

小野澤委員　自治体としては区内という線引きをした上で、そのなかで最大限の広がりのあるプランにしたい。そのときに、区全体が学びの場となるような環境にしていきたいと考えてアカデミー推進計画がつくられている。いましばらくは、その考え方で取り組ませてもらいたいと考えている。ただ、サブタイトルの変更は自分も賛同します。現行計画のサブタイトルがある程度完結できていると

いうのであれば、次の計画にふさわしいサブタイトルがあるはずだと思う。ただ、基本理念については、いまだ道半ばという感じがあるので、このまま生かしてもらいたいと考えている。

水越会長　分かりました。サブタイトルである「文の京　豊かな学びと交流を楽しむまち」が実現できているのか、これからつくろうとしているものなのかは議論しなければいけないと思う。

基本理念は踏襲し、サブタイトルは変更する可能性があるという含みを持たせつつ、いまのところは抽象的な議論は避け、分科会での具体的な意見交換を踏まえて、第4回目の協議会であらためて話し合うのはどうか。

三浦委員　サブタイトルについて確認したい。協議会で検討するべきことは、区民の生涯学習に対してアカデミー推進課がするべきことなのか、文京区をこういうまちにしたいということか。文京区が行政として区をまるごとキャンパスにするにはどうしたらいいかということを考えることと、黒木委員がおっしゃるような区民の生涯学習に対して何をするべきかを考えるのは趣旨がまったく異なるのではないか。

水越会長　やはり文京区でやっていることなので、区内のことが前提になると思う。黒木さんがおっしゃったように、区民の生活が区内で完結していないという生活実態をわきまえる必要はあるが、基本的には文京区の計画を立てるということだろう。

柳澤委員　今回提案のあった「する」「みる」「支える」に基づいて考えると、「する」や「支える」はあまり遠くでやることではないと思う。区内でやる、区内で支えるということを考えると、あまり広げると実効性がなくなると思う。

水越会長　自分がサブタイトルを検討する機会を持とうといったのは、黒木委員の意見を踏まえているだけでなく、このサブタイトルが本当に吟味された言葉かどうかを検証することが必要だと感じているからだ。5年間の計画なので、あいまいな言葉づかいはしない方がよいと考えている。 各分科会で意見を交わした上で、よい言葉が出てくる可能性もあると思うので、数ヵ月後の協議会であらためて話し合いたい。

野口委員　言葉の精査を今後行っていくということだが、観光の観点からいうと、「する」「みる」「支える」の解釈が大変難しい。観光分野の「する」は「旅行をする」ことなのか、観光客を「ご案内する」ことなのか分からない。「みる」に関しても、体験型観光もあるので、一口に観光することを「みる」ともいいにくい。「する」「みる」「支える」という3つの関わり方でシンプルに整理することには賛成できるが、各分野での解釈については分科会で議論した方がよいのではないか。そのためにも幅のある概念にしておいてもらいたい。

次に横断的政策のなかで情報提供が挙げられているが、内容は住民に対するものとされている。観光の場合は、住民だけでなく、区外にも発信しなければいけないので、それを担保しておいてもらいたい。

最後に、自分が勤めている杏林大学は八王子市にキャンパスがあるが、文京区よりも多く、23の大学がある。それら大学はコンソーシアムを組んでおり、共同出資で八王子駅前に生涯学習のスペースを持ち、そこを利用して各大

学が生涯学習講座を行っている。文京区にも似たような仕組みがあるとは思うが、八王子市の動きなども参考にされてはいかがか。

金坂委員　横断的政策の住民への情報提供・集約方法の開発については、区民に対して区が情報を提供するというイメージだと思う。ただ、現在はだれでも、いつでも情報を発信できるので、区民からの情報発信も可能であり、それら情報を集約する方法を開発するという考え方に変えていってもよいのではないか。

黒木委員　観光と情報の話があったが、情報は区民に提供することが第一だと思う。区外に発信することも、区民が発信しあうこともちろんよいとは思う。

もうひとつ観光でいうと、区民が区外に出かけていき、そこで様々な体験をして学んでくることが文京区のレベルを上げることになるので、区民が区外に出ていくことも念頭に置いて考えるべきではないか。

天野委員　横断的政策という話があったが、文京区全体がキャンパスになることを考えると、大学のキャンパスのように学生のホールや生協、学食があってもよいのではないか。アカデミー講座の参加者には食事を安く提供する飲食店があるなどすれば、参加している区民の横のつながりも形成されるのではないか。

水越会長　いまの意見は区内の大学施設を活用するということか。

天野委員　区内の飲食店が協力して、講座参加者が安く利用できるということだ。

小林委員　体系に関して質問だが、現行計画には分野別横断型プロジェクトがあったが、新しい計画における横断的政策と関わりがあるのか。

水越会長　横断的政策として挙げている5つの項目は、方向性であって、具体的な事業はそれぞれに紐づけられているべきだと考えている。今回は記載がないが、大学連携や情報発信などについて、具体的に何をするべきかが示されるべきだと思う。現行計画の横断型プロジェクトは、各分野に収まりきらない事業を集めたものだったが、横断的政策はもうすこし積極的な意味を持たせている。今回は政策だけを挙げているが、具体的な事業はこれから考えていくべきだろう。

田中委員　気になることが1点ある。現在、自治体では学ぶということとまちづくりを結びつける必要があると認識されている。学ぶだけではなくて、その成果を生かしてまちづくりにつなげていくことが重視されている。

基本理念はキャンパスとうたっているので学ぶことが中心になると思うが、基本目標の4つ目や横断的政策にて新しい文京区のイメージを創ろうという点では、文京区というまちを、学び合いながら考えていくということを含んでいるととらえてよいのか。

水越会長　そのようになると思うが、文京区は、ほかの自治体ほど明確にまちづくりに力点が置かれているわけではないと思う。

小野澤委員　現在の計画の範疇では負えないが、現在進めている事業ではまちづくりに関わるものもある。目白台関口地区の公園を再整備しているのだが、これは土木部の管轄なのだが、観光資源として活用していくことを前提として、地域の方や大学生などに協力いただきながら、アカデミー推進課で進めてい

る。まちづくりに関わる事業も行っているので、そういう提言はありがたい。
先ほど、野口委員が八王子市の事例が紹介されたが、10年ほど前に研究したことがある。結果としては、八王子市と文京区では地域特性が異なるので、文京区なりの大学連携の方法を模索しなければいけないということになった。

水越会長　3つの関わり方については必要性については疑問を感じてもいる。野口委員から指摘のあったとおり、観光分野における「する」「みる」はどのように異なるのか分かりにくいなど、各分野の具体的な事業や目標にどのように関わってくるのかが現時点では分かりにくい。ただ、「する」「みる」「支える」という3つの枠組みで事業の過不足を確認するという意味ではあってもよいと思う。これから分科会で議論をするにあたっても、この3つの関わり方については、基本理念や目標、分野などと同じレベルのものだと思う必要はないと感じている。

久松委員　重要だと感じていることは、新しい計画では区民が主語になっている点だ。それが残っていれば、動詞は何でもよいという気がしている。
もうひとつは、基本目標の1つ目に「ひとづくり」が挙げられているのは重いと感じている。アカデミー推進計画で人をつくるということは真面目にとらえると大変だと思う。ただ、区民が主語の人づくりであれば、自ら自分をつくっていくということなので1番目の目標にしてもよいのかなと思う。だから、分野によって動詞は異なるとは思うが、意識するべきは動詞があり、その主語が区民であるということだと思う。現行計画の5つの行動の主語が区であることとは画期的に異なるのではないか。

黒木委員　区民が計画の中心であり、区民のレベルを上げていこうということなので、区民を中心に考えないといけない。言葉にあわせて考えるのではない。言葉を挙げておくと、それにあわせて発想してしまうので、区民が中心であるという前提で考えないといけない。

鈴木委員　区民が中心であるという議論に水を差すようだが、計画の主体はだれか。アカデミー推進計画の主体はだれかとたずねられた場合、それは文京区ではないのか。ボランティアが主体ではないはずだ。
そうすると現行計画の構成要素である基本理念は、区が掲げているものであり、それを実現するための基本目標を持っており、それを達成するために区は5つの行動に基づいて事業を実施するということではないのか。主語はあくまで区だと思うので、「する」「みる」「支える」にしても、区民が主語になってもよいが、区がそれを支えるという位置づけにしないと、計画の整合性がとれないのではないか。
もうひとつ気になるのは、横断的政策に大学間連携が挙げられているが、大学も重要だが、それとともに商店や企業も社会の主体としてある。大学との連携を考えるのであれば、企業などとの連携も視野に入れた方がよいのではないか。文京区では企業のプレゼンスが低いということであれば話は変わると思うが、重要なプレゼンスを持っていると思うので、大学以外の主体も連携する先として挙げてもよいのではないか。

鴻瀬委員　区をどうしたいのか、文京区民をどうしたいのかが混乱しているが、この計画は区民だけが学べて豊かになればいいという小さな話ではないと思っている。区外から訪れてきた人にとっても、文京区はいろいろなことができて魅力的なまちであり、学び交流できるまちだという要素と、区民が区内で様々な価値観を身につけ、活動できる区民になろうという要素があると思っている。ただ、いまの基本理念では、文京区のなかで区民だけのために何かをしようというイメージを持ってしまうので、趣旨や考え方を整理しないといけないのではないか。

水越会長　この計画は、文京区民だけではなく、お勤めの方や観光に来ている方もふくめて、文京区という地域で何らかの活動をしているすべての方を対象にした計画です。ただ、自分は区外に住んでいるので、文京区だけの計画というイメージを持っているのも事実だ。その印象をなくすためにも、これから具体的な事業を考えていくことが必要だと思っている。

鈴木さんの指摘は非常に重要だと思う。この計画は区の計画であるということは大前提だ。ただ、区は区民から成り立っているので、堂々巡りの話になってしまうが、やはり区民に開かれたプランにすることが必要だろう。特に生涯学習やスポーツに関する計画は、土木や経済とは異なっており、区民が自主的に行動することが重要なので、主語を区民にしているということだと理解してもらいたい。計画も、最終的には議会で承認されなければいけないが、公募区民もふくめて、計画策定も住民参加で行っているので、計画は区のものではあるが、計画の成り立ちと実行に移す部分では区民の手にあるのだと思う。

鈴木さんの2つ目の指摘は、自分のそのとおりだと思う。ただ、「区民まるごとキャンパスに」という理念を掲げているのであれば、大学との連携をもっと実効性のあるものにしていく方がよいだろうと考えた。連携先として商店街や企業があることはわかるが、大学企業間連携などと連携先を広げていくと、あいまいになってしまうと思っている。アカデミー推進計画という名前をつけている以上、区内に多くキャンパスを持っている大学との連携は必要だと感じている。ただ、横断的政策として大学という名を挙げることで、商店街や企業が関係ないと思われてしまうのは問題だと思う。

田中委員　分科会で企業の存在が取り上げられることもあるだろう。生涯学習でいえばカルチャーセンターや、スポーツでも民間のフィットネスクラブがある。いろいろと出てくる可能性があると思うので、そういう意見が出てきたら横断的政策に入れるか、別のかたちで計画全体を通じて企業を位置づけるなどすればよいのではないか。

水越会長　今回の意見を踏まえると、現時点で基本目標や横断的政策の言葉づかいを固定してしまうべきではないと思っている。「する」「みる」「ささえる」という言葉や、サブタイトルを後々の協議会で再検討した方がよいと先ほど発言したが、分科会を終えたあとであらためて協議したいと思う。

横断的政策に関しては、情報提供に関しては指摘いただいたとおりで、加えるならば共有も重要だろう。ただ、じつは情報の集約はできないのではな

いかと感じている。様々な情報を1冊の素敵な冊子にまとめるとみんなが見てくれるかというとそうではなく、逆に情報が分散している方が伝わるということが調査等で分かっている。さらに、グーグルなどで検索できるので、情報の一元化や集約ということはしなくても良いということもある。そのことも踏まえて、言葉は精査しなければいけないと思う。それらは8月の協議会で、事務局とともに精査した案を改めて提案したいと思うが、いかがか。
その前に鈴木委員のご意見について確認しておきたい。アカデミー推進計画は区の計画であって、区民やボランティアが任意でやることではない。ただ、区民がアカデミー計画の5つの分野に関して主体的に活動する場合の主語は区民になるという考え方で良いのではないか。

(3) 分科会の進め方について

事務局より、分科会の日程と各会の委員について確認が行われた上で、資料第4号に基づき、分科会の進め方について説明がなされた。

水越委員　分科会での協議は、だれかが意見に刺激されてよい意見が発せられるように、意見が積みあがっていくことが重要だと考えている。初回の前年度の事業評価と最終的に施策体系をまとめる際には会議形式が望ましいが、中盤は自由な発想で意見が言える形式がよく、そのためにワークショップやワールドカフェ形式を取るという考え方だと認識している。ワールドカフェは、懇談会のような雰囲気で自由に意見を言い合ってもらい、それを事務局で事後に整理しようとするものだ。ワークショップは、ポストイットを使うことで発言しない人の意見も集め、みんなでそれをまとめる方法だ。各回の協議の目的に合わせて少しずつ進め方を変えているのがポイントだろう。各分野の特徴を踏まえてアレンジすることもあるだろうが、基本的にはこの進め方を取りたいと考えているが、よいか。
繰り返しになるが、大切なのは、なるべく皆さんの意見を多くいただきたいということだ。これから2か月で4回の会議を行うことは大変だとは思うが、このことだけは念頭に置いていただきたい。

以上